

7 最上川・荒川流域のナイフ形石器について

弓張平B遺跡の発掘で、最上川、荒川流域では珍しく旧・中石器群が層位的に検出された。このうち中層の尖頭器群の性格については、『第1・2次報告』に触れた。今回は下層のナイフ形石器について考えてみたい。

形態面からみたナイフ形石器の特徴は、ブランティング(blunting)すなわち刃潰し加工の規則性にある。ここでは、とりあえず、従来からこの地方でナイフ形石器（以下ナイフと略称する）と呼び慣らわしてきた石器群をも加えて考察の対象とする。

ナイフ形石器の素材は、縦長剝片、石刃と横長剝片とである。この地方のナイフの大部分は石刃素材で、かつ主にその基部を加工した石器である。

A 小国町横道遺跡（加藤・佐藤 1963）

単設もしくは両設の打面をもつ中型の石刃核から剝離された石刃を素材とする。ナイフのI類型は、細長い石刃の打面を基部とし、基部両側縁の先端の一側縁全体を加工し、腹面にも打瘤剝取の調整がある。「杉久保I型ナイフ」の一員である。III類型は、両側縁部を加工したいわゆる「茂呂系ナイフ」の仲間である。

横道では、「神山型」をふくむ多数の彫刻刀形石器が組成されている。幅広先刃の先端に抉入状調整をし、これを打面に垂直な彫刻刀面を入れたいわゆる「小坂型」の類品もある。搔器は少い。

B 寒河江市金谷原遺跡（渋谷 1976）

単設打面の石刃核から剝離された石刃を素材とする。先端方向からの逆剝離面ある、つまり、両設打面痕跡のみられる石刃は少なく、石刃核もまた東山や横前のような円筒形になることは少ない。

ナイフのI類型は石刃の基部両側縁と先端一側縁にのみ加工あるものである。形態は横道の「杉久保型」と類似するが、大小様々、腹面の打瘤剝取調整はなく、また基部加工の一方は腹面→背面の他の方は背面→腹面の加擊で、錯向剝離的な加工のものが目立つ。基部の尖らぬものもある。「金谷原型」と仮称してきた。IV類型は、二側縁加工ある「切出形石器」の仲間である。

彫刻刀は、石刃打点側の背面に抉り入りの調整をし、それを打面とし反対側の腹面に斜めに彫刻刀面を入れた。だから刃先を上から見るとZ字状を呈するものがあるが、素材の利用法で「神山型」と区別される。「小坂型」の類品もある。搔器は少い。

C 新庄市南野遺跡（大友・本間・長沢 1977）

石刃素材。石刃核は両設打面をもつ円筒形。ナイフのひとつの類型は基部の両側縁と先

端一側縁に加工あるもので、先端の整形は急角度の厚形細部調整である。もう一方は同様加工のもので、先端の加工が薄形調整のものと区別される。それぞれ南野のa、b型としておこう。

彫刻刀は「小坂型」が圧倒的に多く、搔器は先刃式の大型品（長さ8～12cm）が多い。他に腹面に周辺加工ある石刃素材の尖頭器がみられる。

D 真室川町小林遺跡（長沢 1978）

背面に礫面を残す单設打面円錐形の石刃核から剥離された中型石刃が素材。I類型ナイフは基部両側縁と先端一側縁に加工あるもので、先端加工は薄形調整である。III類型ナイフは、基部両側縁と石刃の一側縁全体に加工したもので、一側縁の整形は急角度の厚形調整である。

彫刻刀の形態はよく判らない。搔器は先刃式（長さ5～7cm）である。

E 小国町平林遺跡（加藤 1963）

剝片剝離技術は石刃技法で、石刃核は一般に背面に礫面を残す单設打面の半円錐形である。稀に両設打面の痕跡を残す石刃もある。ナイフのI類型は石刃の基部周辺と先端一側縁に加工あるもの、III類型は基部周辺と一側縁全部に加工あるもの、VII類型は石刃の先端部を切断したものである。素材が幅広なI・III類型を「平林型ナイフ」と仮称してきた。

彫刻刀は「平坦型」がみられ、搔器はすべて先刃式で、量的に多い。片面加工、半両面加工、両面加工の尖頭器を伴う。

つぎに、石刃素材の「三叉稜形」（II類型）ナイフについて述べる。

F 小国町東山遺跡（加藤・佐々木 1978）

背面に礫面を残した、円筒形の両設打面をもった大型の石刃核から剥離された石刃を素材とする。多くは両設打面の痕跡がある。ナイフのII類型は、基部両側縁と先端の一側縁に加工のあるもので、先端に大きな抉入状の逆剝離面をもつ。「東山型ナイフ（小国・東山型）」とよんできた。

定形的な彫刻刀は少なく、逆に石刃素材の縦形（先刃式）搔器が多く組成する。大小二種あり、刃部断面は薄型と厚型がある。

G 新庄市横前遺跡（加藤 1964）

両設打面ある円筒形石刃核から剥離された石刃素材。ナイフII類型は、基部両側と先端一側縁に加工があり、「東山型」のように先端は三叉稜形をなす。「新庄・東山型」という。それとは異って先端中央が尖頭状を呈するI類型もある。

彫刻刀は「小坂型」をふくむ。搔器は先刃式で東山同様大・小の二種がある。

最後に特異なナイフに触れておく。

H 越中山K遺跡（加藤 1975）

剝片剝離技術は、二つの傾向に分けられる。一つは縦長剝片剝離技法で、他は「瀬戸内技法」である。後者の方法で剝離された翼状剝片を利用したVI類型の「国府型ナイフ」がある。他に寸詰りの台形状の剝片の一側縁を刃部とし、他を加工したV類型のものがある。

彫刻刀には石刃素材の「神山型」類品がある。搔器、削器の他に、特徴的な石器として小型の断面三角形の石器がある。錐や鋸歯縁石器もある。

I 越中山A'遺跡（加藤 1975）

両設打面をもつ石刃核から剝離された整った石刃を素材とするナイフにちかい石器がある。先端部の刃潰し加工は顕著でなく一側縁の中央ちかくにあるものや腹面に加工痕のみられるものもある。形は「新庄・東山型」に似る（I類型）。細石刃期の小国町湯ノ花遺跡にもある。他に台形状の石器がある。V類型に含めておこう。

以上のほか、ナイフを出土した遺跡はかなりの数にのぼるが、それらは上述の諸遺跡の各類型に包含されるので記述を省く。

さて、ここで弓張平B遺跡下層のナイフを見ると、I類型の基部両側縁と先端一側縁加工のナイフ、III類型の二側縁加工の茂呂系ナイフおよびIV類型の切出形石器、そしてII類型の「小国・東山型」がある。前三者は確実に伴出した。後一者は異なるユニットだが、年代的にはちかいと判断している。

小型の、腹面にも加工ある搔器（図43—2）が前三者と共存した。

これらのナイフは、つぎのようにまとめられる。

- (1) 素材となった剝片の剝離技術に注目すると、① 金谷原にみられる単設打面からの石刃技法による金谷原石器群、② 平林にみられる寸詰りの、単設打面の石刃核をもつ石刃技法によった平林石器群と小林石器群、③ 両設打面からの石刃技法によった横道石器群、④ 東山にみられる両設打面の円筒形石刃核をもつ石刃技法による東山石器群と横前石器群および南野石器群、⑤ 越中山A'にみられる、石刃技法と共存した越中山A'石器群や湯の花石器群、そして⑥ 瀬戸内技法によった越中山K石器群の6群に大別できる。なお、弓張平B石器群の剝離技術はこれらのうち②にちかい。
- (2) 渋谷孝雄は、東北地方での四種の石刃技法を、I 岩井沢石刃技法、II 金谷原石刃技法、III 樽岸石刃技法、IV 越中山A'石刃技法、とし、これはI→IVと変遷するとしたが、平林石刃技法がどこに介在するか明らかにしている。技法としては岩井沢石刃技法にちかいのではと私考するが、年代的関係は不明である。山形県岩井沢の

I (A)										
II (A)										
III (B)			○							
IV (C)				○						
V (D)										
VI (E)										
VII (F)			○							
類型 遺跡	弓張平B	横道	金谷原	南野	小林	平林	東山	横前	越中山K	越中山A'

図56 最上川・荒川流域のナイフ形石器
(縮尺不同、○は共伴をしめす)

石刃技法は磯山技法に似るもの、両者は区別できるだろうと考えている。

(3) 石器群の組成からすると、まず槍先形尖頭器出現以前のナイフ形石器群として、A：横道・金谷原・越中山Kが確実で、B：小林・平林と東山・横前・南野は尖頭器と共に存したかまたはその可能性が多く、C：越中山A'・湯の花は両面調整尖頭器や細石刃に伴う。弓張平BはBグループにちかい。

A群は、定形的先刃式搔器出現以前のものである。さらに搔器を伴うB群は、①搔器のみの小林・平林石器群と、②搔器と小坂型彫刻刀をも伴う東山・横前・南野に二分できる。弓張平Bは②にちかい。

結論を急ぐと、この地方のナイフ形石器はA群→C群の年代的変遷を辿ったとみる。その時間的先後関係はさらに細別できるものであろう。たとえば横道→金谷原の関係は、ほぼ確実かと私考する。弓張平B石器群はC群ではないが、A、B群の剥片剥離技術とは異質である。今のところ別系統の技術伝統と考えられ、その年代的位置付けおよび系譜の問題は今後の課題である。

(加藤 稔)

(文 献)

安蒜政雄 (1979) 「石器の形態と機能」『日本考古学を学ぶ』(2) 17—39頁

加藤 稔・佐藤禎宏 (1963) 「山形県横道遺跡略報」『石器時代』6 22—39頁

渋谷孝雄 (1976) 「金谷原遺跡の石刃技法の分析」『山形考古』II—4 15—38頁

大友義助・本間敬義・長沢正義 (1977) 『南野遺跡発掘調査報告書』

長沢正機 (1978) 「真室川町小林遺跡の旧石器群」『山形考古』II—3、77—83頁

加藤 稔 (1963) 「山形県平林の石器文化」『考古学集刊』II—1、1—16頁

加藤 稔・佐々木洋治 (1978) 「山形県小国町東山発見の旧石器群」『山形考古』II—3、84—96頁

加藤 稔 (1964) 『山屋・東山遺跡—新庄盆地東縁部の先繩文時代遺跡予報一』

加藤 稔 (1975) 「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2、112—137頁